



朝夷巡嶋記 第

春

庫書	30
59	169
6	號架
188	號番
40	數冊

13
3093
20



朝夷巡嶋記全傳第四編卷之五

東都 曲亭主人編輯

中輯第二十九

雲中なる鐵撮棒
腰間る栗柄刀

却説修羅五郎經任の廣庭小聚合する。身近死驍卒二百名を前
立し後小後之の城門を推開しと暮直は馳せ寄りの士卒を
見く。驚破經任がゆきを捕か逃しと相喚り。群立蒐と敵を
よも右隊小受左隊は柱と此も怯む只一方をうち破り走脱
進めけり。或は此の真夜中より賊徒内外の戦ひ小鬼六五五六
さうあり。或は或は逃亡せしむあふのたをくあり。或は經任小後
衆賊がのと死暴隊あり。寄りの捷小乗るおろ。亦是たど先の敗軍小士

吉田屋

吉田屋



昭和九年七月三日 購

月編四編卷五

卒の戦没少くも今光仲は後めく柵中へ入り兵三百騎も入足ざりけり。
かまば是敵射方その軍勢は甲乙さる事と寄るに數度の苦戦の疲勞で
人馬の進退如意なるも今又賊の暴隊を逆と心なりハ早と短
急は突立とと左に披死靡くふるん賊徒へ沿うととまきく進く推
破し競蒐れに寄るもその破ら下と踏留す戦へも一進一退勢
異る力同くかまば佐味下河邊が勇あると争ひつてぞ見えうける。
浩処は曩は義秀の謀は後めく林の中引籠り鯨波を揚さす。四十
個の囚兵の奇兵の計果その圖入りく柵兵數戰を寄るの軍兵二
の城戸をく乱れ入ぬととるくも亦俺們も聊分捕功名志く前度の
恥を雪んとく會樹下を去り見れば賊兵亦が脱捨す兵具あり畚杓あり
物をぬるととて取く轉と身を固め目今寄るに敵較もまきく。

頻に進む賊軍の右隊の方より不意小起く吐と嘯く撃く蒐れに賊徒ハ
たのまは駭遠く驚破朝夷がゆるそ移る殺さそと罵りて忽小乱と
騒ぐ敵小足を立させそと光仲頻小士卒を將大息をも吻せ攻より
ければ衆賊はく辟易く之の城戸小引籠り再び防けと散動く程小曉
この風烈しく兵火四方小散乱し高樓大厦一字も遺るを煽ととく
燃揚もが之の城門の中餘炎根すく猛火の賊徒の後を射ぬかき進
退度を喪く進んとるの寄るの矢石小命を隕し退んとまきりの
煙小嘯びく什仗も死骸ハ地上小横すく河原の蛇籠小似されども尚
水も氷も熾熾めり況又後堂小迷ふと煙小包を敵小焼る婢兒們的
泣くその声遙小竹のえり衆悪克當數を盡く地獄の呵責小阿
鼻焦熱の苦艱もかくそ有けめと想像するもく駭くさ程小経任ハ

憑切なる二百個の隊兵大に撃つふければ唯彼鴉夜又鶴夜又ホホ
 らぬ克賊十餘人を騎馬の左右に立ち六尺餘の鐵撮棒を風車
 の如く振り振る近づく敵を打折れば兜も腦も共小推けく死ぶるもの
 ありけり只その驍勇のさあざむく渠が進止るむと九一丈をさすの旬
 黒雲深く立掩り或へ隠し或へ頭一電光閃れ走り人の眼を射
 けは狙撃んとするもの近づく小樹あざむく射て落さんとさめりも弓と
 彎弓的をゆび只その棒を喫いと用心をばつものさあざむく鶴夜又ホホ
 まつと亂れぬ敵退けられ進み競ひかたの雲小隠れ漸く小後園の
 こより丸と立違はば高利高吉頻小焦燥とひとく士卒を罵獎し前を
 遮り後を射り撃んととまよと雲霧の外より物もあらなくつら忙然と
 頂の上より閃く徑任が鐵撮棒小高利と馬の平首打碎と餘れる棒小

一個の軍兵右の隅打放さす腕向へ礮と花軀ハ其知は平張る馬共
 侶小倒とけり高利吐嗟と下立ちるも引退けハ高吉も古を掉く又
 桃しく追撃も佐味下河邊が悍死と當がくんを士卒ハいよ
 びよ氣後ましく其知は彼知と罵騷ぐ嵐の庭の群雀片を避て鴉夜又
 引るも知る知さすけり光仲遙ふさの経任を走らば毒毒を
 遺まのさあざむく軍功の全う命を預し瘡を負る士卒の苦戦も
 空事あらん天神地祇に近江小賀明神當國の膽澤の神社
 鎌倉八幡大神宮神明擁護の奇特のよやく逆賊退治のさあざむく
 心中小初念の馬を間近く衆居て雷上動の弓をも直し兵羽の征前をさ
 刺す満月の如く彎固めても敵ハ何知と定めぬをり雲の真中へ懸糸と
 切て茂せが弦音と共ふる心よ雲ハ煙の滅るが如く敵の人馬ハ頭と

只彼鶴夜又ハ吭を項へ射徹さし鏃あまらるる経任が乗る
 馬の胸板へ骨を摧れ縫い入る人馬共侶仰反る鮮血ふ塗れ倒さ
 敵も阿とむる齊一驚馬嘆せざるなり。経任既小馬を射させく。そが俣直
 軀と下立程小光仲を敵を認めく透もあせせらるち頬ふ二の箭へ則
 縮く。避んとする小暇なれば左の臂ふごとく右の戲さると肘推曲く右
 引抜つ流る鮮血を物ともせむその箭を發矢と投返せ射る
 不思議の心煉剽疾く光仲の面をさうく閃光あつて
 弓のく丁と落ち落さ送ふ得る武藝の奥妙甲乙たれ小似とさども

経任竟ハ御破さる刺矢傷を負う高利高吉二騎相並て鋒薙刀を
 見し。追ふせと馳り前後小後小諸軍兵遠れぬを横矢を射けり。
 近れハ又をうち振る競ひ蒐む光仲も只管旗を進めけり。さまたふ又
 賊兵ホハ脱とくくとおひええ及あまを退れく路次いと陟死築垣の辺
 齊一踏駐り且防戦せり。経任とをば見もくも鳴夜又を先小立
 金撮棒を瓦落めり。突立と後関のかさう先とゆく程小高利高
 吉信と見く追懸撃んと焦燥ども石をりく築籠る萬年垣の間で
 賊徒小防だ用と小敵あるとと速小殺山崩とべくもあす松バヨんく
 賊首経任をうち漏れ欬と敦圍巴士卒も俱小奮戦しく推破くんと
 足を跪前後を其処小争ひつ瘡を肩ふめらんヨメかまけるさう程
 朝夷三郎義秀乃ハ襲ふ二の城門の邊とく賊徒を撃打殺し寄舟の

軍兵柵中よりやうち入りぬと云くけは嗣忠が逃る城追ふ頻に進む
 呼留め和主へ何と云ふかえん。こゝこの柵を火攻せし名を取らんとの
 為るまじ只文遊の義小仗と吉見冠者を救んとありされば冠者を
 救ひ出しの賊徒をヨク殺しと云ふ遺る経任のこゝろん寄るにやう
 援を獲て中より柵入るの成され又彼小先と経任をりも彼と云ふ
 人の功を奪ふ似たり勇士の爲業をせしと云ふ城門の寄る小濃り
 彼等小経任を敷きとべし。よりや経任小相後小残黨はあつた猛火と
 人小と里籠らして天誅のうで遺る死且く休め彼知ゆ、遠見せん
 先こ立ち後関のあつたなる堤防のサ生小うち登る云の城門の戦ひを
 快けふうちつてをり。かく賊徒ハ寄る小敷きとく大半滅亡せしと今
 人切れ小退れ柱と経任遂小後関より脱去るは勢ひあつた嗣忠ハ衝と

立ちあがりて鋒小携りつしと見定むとち驚れ朝夷め彼を見及敷
 遺るさう賊兵ハ十四五人ハ過るるほど垣と垣との間ハ防げ寄るハ進
 むとをぬきし。経任脱れと云え今これをりも敷き留めし。後悔其れ小
 立ちとん誘ふとののけく驀直小走り下り。鋒を指し経任を遊撃んと進む
 小を義秀ハこの光景をいれた騒ぐ氣色とく噫面倒ちある奴原のハ人
 此をこれハ攘りてとてをり小勅とく加久とく彼をりの敵撃と云ふ。後
 嗣忠のこゝろの亦唯とく下なる弱虫共と吐れとを起し塵とち
 拂ひ穿てを隄防よりをり立ち當下馬艱嗣忠ハをり経任小向ひ近り賊徒経任
 こと此瓜知るや吉見冠者譜弟の家臣馬艱標吉郎嗣忠あり朝夷殿の
 隊小隷く真夜中より働ける聞もあつらん見もあつらん天羅寔ハ密
 しく双ハ汝が頭小臨めを觀念せしと罵責く短鋒を抗し刺しと云ふ。経任

うつろく大なる怒り。彼追拂へと敦圍味る声をもよおす。鴉夜又も大
 刀を真額又抜翳しく。走り蒐れハ嗣忠ハ妨まかんと丁と突く。鋒を度矢と
 受留めく下を拂へ。跳場も又突出せ。身を反。少選ハ挑。鴉夜
 又ハ合。大刀を度丁と卷落さ。怯む。透さ。鎬を嗣忠ハ鋒。乳
 の下串ま。搦小著。木兔の頻鳴如く目を剥く。仰亂ハ反。死
 け。この間小寄。の士卒ハ彼十餘人の賊兵を遺る。斫伏せ。高吉高
 利真先ハ經任を追蒐。才。佐味高利ハ小あり。下河邊高吉ハ小あり。
 と名告懸。こ。嗣忠共侶三方。推取籠く。經任ハ。怒
 怒。鐵撮棒を打振。右小當。左を拂。此も撓。戦。光景漢
 末の呂布單騎。劉侯張ハ敵。如く亦是毒蛇の谷を繞。云
 虎を啖。の勢ハ。嗣忠高吉高利ハ怯。小あり。ね。その

梟雄怪力ハ當る。短鋒も大刀も打折。危く
 見え。光仲更ハ士卒を進め。八方より箭を飛。射て捕。つ。も
 經任ハ。撓。雨。斃。征。彼棒を。打落。小
 適。身。立。も。實。鎧。著。故。小。竟。亦。裏。被。寄
 前。小。敵。と。ま。俄。然。と。後。あり。の。棒。小。中。ら。肉。破。れ。骨
 碎。け。け。什。さ。ん。た。わ。け。の。バ。丁。を。寄。ハ。士。卒。又。勢。な。れ。一。個。の
 敵。小。撃。立。られ。も。の。靡。た。り。度。と。山。崩。と。染。垣。の。邊。引
 退。け。ハ。經。任。と。孤。追。捨。て。走。り。去。る。と。前。面。小。直。軀。と。立。素。肌。武
 者。是。則。義。秀。あり。大。路。狭。と。立。塞。た。る。勇。敢。無。雙。の。勢。ハ。經。任
 也。を。敬。馬。と。そ。其。如。小。留。ア。透。を。穴。規。ハ。撲。ん。鐵。撮。棒。を。食

直甚義秀信と疾視く妖賊外とも路へあり義秀既小なり小あり汝を
 俟とあさざるやといひせりあへど冷笑ひ原来汝が朝夷ある歎目小物見せ
 と身をひらうく。掛声悍く打棒を肉りと外せが踏ひて微塵小あれと
 又打かる棒の真中丁と合ふるまうまう経任さうろ遠く引放さんと曳声
 如く引どめく此も動くまう朽をうと一身の力を左右の巻小入まう
 息を限り小引合さう寄子の士卒へこれを見く。酔うが如く醒うが如く箭
 を射けむ遠巻さうち守りてを居さうける義秀の名の隨小経任を
 疲労の遠を合し也と声さうく。左邊へ礮と引捨まう経任を棒の
 共小七尺あまり怪飛を鞭をうと踏笛りさうまう棒のさう然とあれ
 遠あさ小捨らまう。あまを念やと焦燥の大刀抜翳く後方より
 砍んと進む刃の光小義秀のや見えりと見りと引抜く俱利伽羅丸

降魔の利劍ハ勇士の刀尖丁礮と破結ハ鋭死大刀風ハ四下を拂く挑
 戦ハ程ハそあま義秀嘯く肉をうと刃と共ハ経任が首ハ地上小礮と落驅ハ
 高く筋斗まう足を揚さる鯨腰突くく投らまう如鞭ひまう寄子の光仲
 高利高吉士卒或ハ弓弦を鳴し胡瓶を敲死く感さる声霎時ハ鳴も
 止まうけり。あれを義秀ハ絶く誇れる。氣色まう刀を腰小拭ハ納めく
 遙小寄子ハさう招死各位送小散動を禁めく静小くさみふるをさけ
 経任が首級ハ汝達ハ月来欲せりめらまう謙倉へ齎し勸賞ハ顔
 れく。こまハ只友の為ハ國家の為ハ又民の為ハ已とをゆむ此奴を許さぬも
 寄子ハ援けく名を取り賞を徴さるまう。さう彼鐵棍棒ハさう又用さ
 ろう。あれが分捕さるまう。喚まう。件の棒を擲取りく。いとも輕け小引提く
 後突のう又走さるゆを光仲類ハ慚愧く。下河邊高吉のりく義秀を

義秀一喝
を斬る
経任

朝ひあ



佐味高利

斬る



光伸

つぐ夜叉首級

つぐ夜叉首級

つぐ夜叉首級

つぐ夜叉首級

追せし何れゆらん及ぶと。徒小還り身おぼいしく心安らぶ。跡
 嗣忠を召近つてその素性を問ひその武勇を嘗その火攻の計畧を
 訊る。嗣忠ハ義秀が簞姫を救ひし事より古又の趣更小義邦を杖押く
 賊徒を撃靡ける為体廣光ホがるのまで遺るくそのと告ろく。光
 仲竹のく且歎び且感嘆しく已まき又義邦を迎んとく。下河邊高吉と
 馬兼嗣忠を遣しけり。この時天ハを向明と程小経任が年来土民を
 虐く奢る隨小美を盡せ。大厦高樓ハ燒落と二三の城門の間守
 屋西之軒と兵糧倉の之残り。光仲件の守屋入く経任が首級を
 実檢し更小雜兵ハ部々一隊ハ餘燄を滅させ又一隊ハ
 兵糧倉を開く。士卒の為小飯を炊せ騎馬小勝。使を擇く鎮守
 廣人遣し経任誅伏の趣を廣綱小報知せけり。折る折る城戸四郎武

詮水草太郎五昌之ハ六十餘個の雜兵小生拘の賊徒を牽り來り神
 井鬼六が首級と共小大將の実檢小入り。各苦戦の為体及武詮小
 後ハ十個の勇卒が戦没の顛末を詳小告る。小光仲竹と潜然
 涙含まき感嘆。現今曉の戦ハ小鋭を突堅を辟かれ命を鴻毛より輕せし
 小隊兵ハマけとも誰う又この両勇士の右小少り。のあらんや城戸と不
 思議小萬死を吐く。乃ハをりく幾百騎の敵を内より殺崩し。刺
 賊將吠又が馬の脚を薙倒し。佐味氏小その首級を取らせし。ハ勇あり謙
 る。只このと更小水草太郎五を援く剛敵鬼六を射て落せし。
 趙子雲が風ありといのま。水草ハその勢六十餘名。小寡兵をりく賊軍
 の四百餘騎を蒐散し。賊將猛虎が首級を獲く。四郎共侶復讐の宿志を
 遂ハ勇あり。ハ馬子孟起が風ありといのま。城戸四郎小後ハ

中ちゆう紛まがれ入り其その如ごと小命せいのちを損こへたる彼十個あの壯夫まさむねを惜おひ小餘あまりあるめられ親おやあるの子こある妻よめあるのめこれこれを扶持たすめ飢寒うきんの患うしみいなきまめんめんくも有ありぐえ武功ぶくうゆつと賞せうをまはさ武詮ぶせん曰いはく頭あたまを擡た某たが小幸こしゆきひ小父兄おやあにの怨うらみを復たせし母嫂ははあはの讒ざん敵將てきしやうヲ蘇おこす暴道はうだうのいぬ日横死ひごころしせしと受けは遠憾とほざしくいと必かならずのむむと嘆息なげきとこの孝こゝろその義ぎ小雜兵ざふべいやうと感佩かんぱいせざるあるとけり却説かへして高吉たかきち嗣忠すしゆハ黎明れいめいの比ひ及およ小後ご漢かんのほりゆゆ義邦ぎぱう廣光くわうくわう不逢あひく嗣忠すしゆハ進まり迎むかへ云いふと告つるよらん高吉たかきちハ恭こうしく姓名せいせいを告つ来意らいいを速すみく先小立せんたて後小後ごご後ご小守屋しゆゑ小来きたの光仲くわうちゆう遙とほく是こゝ小忍にんく慌忙わうばうと出迎いであむ之これ冠者かんしや尊體そんたい恙やれや二ふたも一ひとつ別わか以來いらいあり且かつらるるるとと取とりて上座じやうざ小請せうせいととも義邦ぎぱうハ尚なほよろ解とねばうらんとするのそののいふと廣光くわうくわうハ咏よみふと筆ふで賈か子のほり小膝ひざを進まめ光仲くわうちゆうふら對あひまひ昔むかしへ媼おんな子こ今いまハ

ヨ又また加賀かが賊退治てつたいぢの大將たいしやう小次郎せじらうハ嗚呼をこるふげとどあは忘れもせど和君わぎみガ目めゆも冠者かんしやを冠者かんしやとこそと飲現くわんげん軍功ぐんこうハ高たかかぶぶ一ひとつ信しん義ぎハ關せきらり去歲きその暮春ぼしゆんの厄難やくなん小勝澤せうしやうたくのほりゆくゆく冠者かんしやハ後ごれりとも加賀かがへゆゆふのふり去藏きさうの大田おほの小世せを避よる廣綱くわうこうハ値ち得とせんや友ともを捨すて榮利えいりを討うつ或信あるしんといらん飲義くわんぎとせん飲くかままけけのり友達ともだちの舊交きゆうかうをのりともとぞと主君ぬしぎみハ義ぎ小北きた身みなき榮利えいりを討うつ才さいあるれば危難きなんを信夫しんぶの館たて小避せりく更さら小逆賊ぎやくてきの毒どく小陷おちささ夫婦ふうふをを受うけしと義ぎを守まもりをのり祐たすけ神かみあり朝夷あさひら生なは救すくれ遂つひ小持せ言いはれ披露ひろうあそれをしと推辞おしめん飲くふそと怨うらみむむ光仲くわうちゆう怒いかれ縁故えんこを詳くわしせね恨うらみ下したも理ことりあり

あつとゆふともこゝろに只こが非を飾るふあつと。されこが口親心を解か
 便安利口小任さるめと多りせん已と成得ざるもこが人を六下河辺
 小三郎高吉アそとく知てこれ小代アと説きたると父が高吉進三安く
 廣光小うち對ひ三二の怨言よりあれは賀殿のそつ友を捨てる栄利小
 走つ不義あつんや。さか某豫さる見聞し隨ふ吉げは飲ヨ賀殿ハ
 勝澤こそ時夏ホを防留め一と戦ひ難義小及びうとも驟雨ふとそ
 必死を脱と冠者を遠く延え為小東のうと走里ゆかかく又時夏ホハ
 鳥鵲川ヤぐ追逼アと再び難義よ及びと義秀の養母巴の尼ハ藍
 玉院の名代小信濃の善光寺へありのく圖らどら小救まて更毒
 蛇の臆を脱と鳥鵲川を渉せと心東小あつと巴の尼ハ別を告て
 冠者小追著んとあつと寺法あつと放遣をとを許されとと再び再生の

思あつと外去んハさげかくとろろも武藏さる太田の藍玉院へ伴れ
 菅浦尼公と廣綱朝臣の見参小入つあつと。さてこまやと高吉ハ傳
 聞さる趣さるかくマ賀殿ハ次の日尼公小暇を請う。加賀の小松小
 赴るる數日冠者を索りかど佐味ハ内ハ彼地小在るねその消息を
 知る小より折つと追捕の嚴命下アと卷よ高牌を掛出。こがハ
 さつとありその人の所在を穿鑿せられ身の措所さきま再び武藏へ
 脱れ来く菅浦尼公小扶持せられハ玄歳の夏のるなり。さてこの條ハ
 眼前小高吉がんさつと所之こそ後ハ箇様々如此この義小よりやと
 朝臣ハ愛顧せとと且見姫を妻せと絶つ藏人仲家ハ名字之言チ
 るとハさつとね。さつとあれども賀殿ハ舊文を送忘せと冠者主從朝妻ぬ
 の往方を名ハ懐あつとと苟且の言の葉小もハハ出あつと日ハさつとたつと

故小此度經任誅伐の台命を稟ゆひる。その情愿ふあつねとも逆賊を討滅し冠者を救ひ平らぐ。公私両方々面目あらんとしつゝ人の性あり差別あり心の亦あるのみあはれども豈きのみ賢みとけふ佞奸とありのみやんや願ふの主後疑心成散しく朋友の義を全し多へあつねば自他の幸あらんと緝詳不説論せむ先仲ハ又たあつねば釋く額ふかえ二二疑ひまご解む冠者何とやゆめ。倘高吉が言信ごまへ駿河前司小向あつねられ家臣と外舅の言葉ハ證ふらふとと思ひあつね巴の尼小再會の目を俟よる外あつねあつね初の井平あつねあつね疑ひも受まれば。勅擇取らんと武志の數ふも入アより名利のあつねあつね志の仇ありまると嗟嘆しくあつねあつね足久まへ廣光ハ後悔の頭を要時擣ぬと義邦も亦慚愧しく席を降りて貌を改め某主後愚癡なり疑ふあつねるを疑ひ良友を誣人とせり。

昔は面目あり。曩の下の野を去アしとれ仇を防ぐと危穴船を救れ今又和君の武功あつねる。國家の宍身の讐方。妖賊經任滅亡。贖時夏を懸とやとく聊恥を雪めらる。莫大の恩義あり。縦疑はるやあつねあつね恨むはあつねあつねあつね殊更過言小及びハ廣光が疎忽あり。渠小代りく勸解侍るを礼を許さるあつねあつね。賄話らあつねあつね廣光ハ額の汗を推拭ひ某のあつねあつね所成も憚らふ。外やをも首さる。失敬過言。駟も亦及ぶとこの罪萬死小當るべし。御家臣の明辨ふと疑念ハ氷のとく解らる。軍法小行はるるとも一毫も恨み諺てそへと席を避く陳ぶと先仲喜悅の眉をいりあつねあつね又吉見主従を舊の席小著る。更小嗣忠武詮昌之ホを召近り冠者ハ公意ありと當坐小疑心を釋しハあつねあつねあつねあつね四郎と太郎五八日より友を思ふ志を知りつゝめあつねあつねあつねあつね

武詮曰之ホハ... 光仲の志 舊文今小等閑... 只連小義邦を救とせん... 神井鬼六を撃つ... 廣光嗣忠ホを兄と云... 五河... 正法寺の技城... 四郎太郎五共侶... 皆圓山の館... 戦歿せど... 小廣光嗣忠ホも慨然と... 賊を誦... 又只武詮曰之ホ...

けり當坐の問答果... 某冠者と舊文... 追討使の後... 此某許... 官途小進... 小松の郷... 務小暇... 今青雲の時... 謙倉へ帰参... 敬むれ且... 猶且恥... 和殿ハ在... 鎌倉...

とありた去歳に某朝夷廣光みふ小松へと走りて主従朋友ありふ
ちるあ比の千辛萬苦も今又全聚とべいつく如く夢の如し夏憂るれれ致
ひむち。苦後の樂こそ真樂とめ好意謝する余あり。いと致しくいと
回答をよまへ高利へ坐小羞く頭を拵る宣ふ胸を。和君と二三の
あふ藏人ぬあり。朝夷あり。いづも向とも憚をいひとく小辞のあをど面目
なり。と勸解ごちく去来話る舊友の笑坪の會小廣光も佐味が今亦隔
あれ志を嘆賞して。嗣忠共侶小武詮目之ホと向後を契く送代小
忠勇孝義を譽言答言らう。辞のうづく四下小近死士卒とく耳側てうち
聴つ得くこれめめ時ちるかも友あるかもと讚美せり。

中輯第四十

靈佛の菜摘籠
豪傑の葛藤索

却説義邦の廣光小齋なる刀野太郎時夏が首級小分捕の大刀を添て
実檢を請せし光仲こまを受納めくその武功を稱賛し感悦のまあり
あや假小寛治の佳例小任しく剛臆の坐を定めず士卒の軍功を評とく
凡此度の軍功へ平泉の柵を火攻し賊主経任を討とり朝夷生第一番
あふ。その次の反賊時夏を執とる。前行賊贖ひ。吉見殿るふを彼へ
和田の陰見しこまの貴みの公族と士卒と共小まを。第二番の城戸四郎第
五番の水草太郎五木が武功尤高し第六番の海老尾加世丸。厨川の兵糧倉を
計を行ひ。第七番の江三二及馬鞭標吉郎第八番の下河邊小三郎第九番の
軍監佐味生第十番の間中隼人この他の士卒も月々かり。こま只假小評とる
いつて馬心意に任とる。柳營。頼家卿。小ゆえあひく。口命小依る。九の経任
時夏が首級の外小鬼六。武詮目之ホ。五十五六。高吉。吠又。鶴夜又。徳大時
光仲

射す。鴨夜又射す嗣忠射すホが斬首五級既小実檢射すをらんぬ只恨射すくハのまど鐵槍矢
 藤五と象子彈平太が首を獲射すまたこの團坐小第一番の席を空射すくもつと
 亦是ひちの憾射すとつが義邦外面射す見出射すく。現朝夷ハ経任を替射すりあつ
 この丸射す上立射すよ射すご射すら射すん射すど射すろ射す。某射すい射すゆ射すら射すく射す誘射す引射すす射すん射す三射すも射すあ射すれ射すん射すど射すい射すひ射すけ射すく
 立射すん射すと射すも射す瓜射す光射す仲射すハ射す遠射すく射す推射す禁射すめ射す冠射す者射すさ射すの射すを射す勞射すり射すあ射すの射すを射す縦射す彼射す人射すの射す錯射すて
 光射す仲射すを射す憎射すむ射すも射す冠射す者射す小射す碎射すせ射すど射す又射すさ射すら射す小射す何射す國射す一射すと射すく射す赴射すく射すべ射すれ射す顧射すみ射す逃射する
 賊射す徒射す成射す追射すめ射すく射す柵射す外射すあ射すら射すせ射すゆ射すめ射すゆ射すが射す今射す招射すむ射すも射す遠射すく射すど射すく射す小射す集射す合射すん
 只射す心射すり射すま射すら射すれ射すハ射す籠射す姫射すの射す人射すも射すか射す。其射すの射す悪射すき射すら射すく射すハ射す標射す吉射す郎射す小射す使射すり射すか射すど射す村射す落射する
 尼射すを射すあ射すら射すハ射す藁射す二射す郎射すの射す隸射すあ射すら射す非射す常射すの射す患射すの射すを射す御射すぐ射す小射す足射すく射すド射す鎮射す守射す府射すの射す城射す小
 送射すり射すく射すよ射すら射すハ射す勞射すり射す進射すむ射すま射すら射すれ射す小射す迎射すと射すら射すし射す人射すと射すい射すハ射す義射す邦射すの射す殘射す小射す後射すひ射すく射す廣
 光射すと射す嗣射す忠射す小射す云射す云射すと射す分射す付射すま射すら射す光射す仲射すも射す亦射す士射す卒射す小射す命射すく射す轎射す子射すを射す求射す出射すさ射す。雜射す兵射す數

廣光射すホ射す又射す後射すく射す遣射すり射すけ射すり射すの射す程射す小射す火射すを射す滅射す留射すく射す一射す隊射すの射す士射す卒射すハ射す経射す任射すが射す婢射す妾
 二十餘名を擷取射すて射す本射す陣射す小射す牽射すり射すく射す身射すの射す云射す云射すと射す報射すり射す久射す光射す仲射す端射すら射すく射す出射すく
 乃射すは射す死射すん射す小射す後射す堂射すう射すく射す燒射す死射すす射す婢射す兒射す們射す多射すう射す中射す小射すと射す且射す云射す云射すく射す曲射す演射する射す。
 水射すを射す被射す死射すく射す燻射すを射す脱射すし射すて射すも射すそ射すの射す本射す貫射す素射す性射すを射す嚴射す又射す質射す問射す小射すこ射すみ射す良射す家
 の射す女射す兒射すあ射すら射す経射す任射す小射す思射す各射す奪射すら射すま射す已射すと射す成射する射す後射す小射す拘射する射す。隙射すも射すあ射すら射すハ射す逃射す走射すん射すハ
 豫射すく射す公射すを射すあ射すら射すく射すま射すど射すも射す竟射す小射す便射すを射すは射すら射すま射すし射すの射すう射す又射す燒射す死射すせ射す婢射す兒射す們射すハ射す慾射す小
 我射す心射すあ射すら射すけ射す端射すを射すま射すど射す経射す任射す又射す使射すり射すを射す身射すの射す采射す小射すせ射すり射すの射す共射すあ射すど射すあ射すり射すけ射す光射す仲射す既射すは
 乃射すは射す公射す質射すく射すま射すど射すも射す嘆射す息射す一射す嗚射す呼射す賊射す中射す小射すも射す清射す濁射すあ射すら射す欽射す天射すハ射す善射す小射す福射す。必
 淫射す小射す禍射すま射すそ射すの射す忘射す報射すく射すの射す如射すし射すか射すそ射すと射すま射すら射する射すハ射す懼射する射すべ射すし射すと射すま射すら射する射す警射すめ射す人射すを射す警射すめ
 躬射すハ射す件射すの射す婢射す妾射すホ射すを射す高射す吉射す小射す預射すけ射すつ射す後射す小射すの射す親射す里射すへ射すみ射す送射すり射す遣射すり射すけ射すり射す。
 又射す光射す仲射すハ射す生射す虜射すの射す賊射す徒射すを射す責射すく射す鐵射す槍射す矢射す藤射す五射すが射す事射す成射す向射すく射すハ射す渠射すま射すと射すぬ射すら射す。

経任が石室小菟めらる。幻術の秘書を竊取り、刺経任を欺てその隊兵
 五七人と共小厨川の柵を破れ、二千金を掠奪す。逐電をくす小紛らひたり。
 画を又矢藤五が相貌を問究め士卒の中画を好むもの
 當國鄰國北國ヤでも俄頃小羽檄を飛らる。その國を守護頭人小
 賊將鐵指矢藤五ホを擲進まると徇させけり。光仲はかた旋つ佐味高
 利と俱小柵中を巡覽る。経任が偷貯る金銀珠玉巻衣をば毫も遺
 さで焼失し、倉小積る兵糧ハ一粒も恙あり。光仲は又矢藤五を
 高利の陣中糧竭け人の炊を缺んとせり。賊徒の財宝を焼
 失くこの兵糧の残す士卒の苦戦を憐れ天の賜をばあはれ。鎮
 守府小食之をん。急小下河辺高吉を召

うと云ふと分付と高吉能く一倉ある米を車小乗馬小負し
 鎮守府送る程小地郷の農民ホ曩小逃去り賊兵を或ハ撃殺し或ハ
 擲捕す牽まらるの百四五十人及び多。光仲は賞人別小米二斗を
 取せり。高利竊小諫すのや。経任既小亡びとも厨川の柵ハ象子
 彈平太員持中曩小躬方の弱り兵糧の竭たる故と。今百姓
 們の功を賞す。可惜夫食を費し賢慮つやくころ。光仲は
 父ハ光仲微ぬ犬ての趣理義小稱り。功あるものを賞せり。
 何をく善を獎ま死且この米穀のみ。経任小虐畧す。原是はの米穀
 あり。彼が物を彼小返まを費まといへん。光仲ホが武運竭まはる。小
 糧有餘まるとも厨川の柵を落し。亦復夥の兵糧を其獲へ。惜むる
 と説示せり。高利言下小心服す。その大量を感し。浩如又馬養嗣忠かり

才と。まうにべつとわやとひふ光仲躬と陣所小入と。義邦と共小こり成使く小
 嗣忠がいつを。某ホ筈姫を迎ととをうんぬる。藤と朝夷生又使しまし。
 中尊寺村のまゝなる。村落小舟ゆえ。尼が菴やあると同はるのめり。
 いろ。いと訝しく多の。廣光共侶彼此を隈る。索巡る程小引入る樹立の
 間ふいとまゝなる堂ホをけり本尊ハ御體三尺あまるまゝ。觀世音立せぬ王。
 筈姫ハこゝろあつとる。塞錢櫃小身を倚りて。熟睡しくをり。又葉二
 郎とやんへ。縁頼小尻をたけ。こゝもよく睡りてをり。廣光也こと呼覚。葉
 二かどや姫入を。筈小置をまゝ。小侍のまゝ。たると同はて葉二
 姫入も頭を擡け四下を廻視。大らるる。驚る。葉二郎先ののち。
 朝夷の指圖小任と。姫を潜しをす。則この知る。尼も今やこふ
 在り。昨夕も。弟も心も疲勞て。多も目睡り。呼覚さす。熟視は

わや。筈小いとく異と。不思議といふべの。吾倚もころぬ。とひ
 又姫ふ小向をま。葉二郎がいつふ違つと。あつの尼とい。懇小昨夕と
 今朝の炊もも。つ次并摘りて。管待れ。夢と。鉄のひ。と
 宣へ。と。雑兵を遣と。近れ里人ホを召し。件の堂の縁起を問ふ。
 里人ホ答て云原この觀世音井ハ圓通寺の本尊と。同木同作の靈佛あり。
 秀衡が。世小。判官殿。武運長久の祈願所小。適當寺を
 建立。この佛像を安措。新圓通寺と。跡は。秀衡が。後
 判官殿も。程。滅亡の。この寺遠ふ。頽破。その堂をの。遺
 せ。か。筈の尼と。觀世音の化現。姫入。この年来
 觀世音を信。且彼寺の判官殿の。小建。と。又彼靈佛の
 令弱ふ。を。姫入。小因縁。利益。と。又彼靈佛の



新圓通堂

寛文二年二月十七日
福祿壽平素指

賽



圓通廢寺
小兩使
篋姫小謁

文治二年七月

初小朝夷生をりく。経任を撃せんとも。よの柵中の繪圖を取らん。妙智
 力を添ふの軟むのあはるのとも。彼靈佛の両足小田の泥乾張著く
 のち又その袖小芥の葉送さる。かゝる奇特小姫への感涙を堰あふるを
 こゝろともあきこころ良への。今天つ日を忍めあふるもよの御佛の利益小より
 けん人よ。要時等。普門品一卷をこゝ小讀誦しなり。あはれも大悲の影
 仰んあか尊やと身を投俯く。おがむ多バ葉二部も讀歎隨喜の思ひを
 起し。雜兵小至るまう。深信膽小銘しる。姫入讀經小程あまふ某先
 走。成仕りく。よきまのうを報せると言爽小述く。義邦耳を側へ。
 うち敬馬くまで深信の志報空く。今更に感悟く。光仲も又信く
 破る。次の日件の里人ホを召し。圓通庵寺の觀音へ米錢夥く。成
 寄布を吉見殿夫婦の為小永々香華をまわらせ。と叮嚀小下知し。されば

又この曉小柵外より陣營を守り。二百餘名の瘦士卒へ鬼六が一隊乃
 賊軍に追走せしむ。泉川の上小夜を明し。かの時平泉の柵小入り。亦
 件の靈驗を傳せし。小心清く。くまるとあり。舊病頓小本復せり。これ亦
 觀音菩薩の利生をえんと入みかひひけり。さゆ程小江三二廣光ハ葉二
 郎と共に篋姫の轎子をひき。相後めり。わり来ぬ。光仲ハ嗣忠武
 詮ふ。門内小出迎し。馳くその轎子を帳中。小扛入。さや。義邦共侶對
 面。夫婦再會の情義いまで告げ。いづく濃々疇昔離居の悲歎
 既小云く。涙坐小ゆる。落さる。分鏡い。合さ。いと允真愛苦を一朝小
 説盡さへ。亦鳥鳳並翔。日の歡喜小千載の齡を延る心地とめり。
 よの條状態ヨウ。細小写さ。多くある。者官互想像る。又その
 次の日小間中集人守直ハ廣綱の使者と。鎮守府よ。来著し。経任誅

伏の慶賀を述べ、光仲義邦のさきさき。諸将士も対面して籠城の無
 異を祝し、その軍物語り。陣中の苦を慰めけり。光仲の便宜を
 遣姫を鎮守の府城へ送り遣まべく、その遣姫は今要時朝夷ぬを
 待てて救ひをせられ、敵を面前に述べせめ、辞せどいふ人の恩を受く。
 恩を知ぬ、似そえ、欽と廣光といひせ、光仲これを義ありと答て。
 敢又促さず、守直ゆ、義秀の武畧大勇。義邦の復讐、藁二郎が忠
 義まで。諸将士の軍功を述べ、小前司殿を告ぐ。小前司殿の
 知る。鎮守府へ返しけり。かとも義秀の再び、女を来さす。
 光仲遂に疑念起り、義邦と相譚り。廣光嗣忠藁二郎を召近つけ、
 朝夷生の豫より。冠者を救んと欲せし、武略の外、小前司殿の
 僉と答り、と答け、中、小前司殿の且く頭を傾け、某前夜朝夷ぬ、

越の稲向許消息を云々と告ぐる。その中、われより彼人を越路、逢小
 必、去、欽、この外、小前司殿の投り、ゆ、死、こと、思ひ、當ら、む、ゆ、この、
 光仲頭をもち、掉杏、朝夷の義勇の人あり、縦この春、越路あり、婦、病
 の床、小前司殿、と、傳、之、傳、と、い、ふ、人、小別を告ぐ、その、ま、か、り、さ、る、の、か
 らんや、その、心、光仲を憐憎、と、悪む、の、ま、り、近郷あり、農家、を、旅、宿、小
 某、其、小前司殿、と、い、ふ、人、二、三、年、来、彼、人、の、さ、る、を、い、ふ、れ、ぬ、
 某、藁二郎を招く、その、旅、宿、を、索、ね、り、か、り、ふ、く、と、死、論、く、と、小前司殿、
 良、く、と、い、ふ、亦、高吉と、雜、兵、數、部、く、近郷を索る、せん、と、い、ふ、と、い、ふ、
 義邦、この、議、を、善、く、と、某、夫婦、ハ、朝夷生、小大恩を受、る、の、め、と、い、ふ、人、を
 召、と、い、ふ、と、い、ふ、某、某、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 彼、人、推、辞、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、
 俄頃、下河邊、高吉を召し、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、

あつをぬき。雑兵夥部。人々小後。義邦の廣光と雑兵を夥めて
 後門より出づ程。高吉の藁二部を案内。あれも雑兵夥む。一の城門
 より出ぬ。又光仲ハ佐味高利と武詮昌之嗣忠ホを聚會。いふ事。
 盤手郡厨川。柵の経任。偽将象子。彈平太員持。あり思慮。不足
 ぬ。本柵を逃亡。賊徒彼知。集ら。一朝。小攻破。か。これ。豫
 朝夷。け。も。い。で。牙。の。翌。ま。の。俟。ぐ。この。曠。昏。る。人。馬。を。進。通。賢。路
 次。を。急。ぐ。佳。例。小。任。先。陣。ハ。武。詮。昌。之。と。定。め。る。ま。づ。陣。徇。を。さ。す。
 ける。程。小。日。ハ。西。山。小。傾。比。下。河。邊。高。吉。ハ。藁。二。部。と。共。か。り。來。小
 多。光。仲。ハ。且。俟。つ。け。る。消。息。を。い。ふ。と。向。小。高。吉。ホ。義。秀。が。頃。日。旅
 宿。小。せ。し。の。百。姓。の。家。に。さ。え。近。れ。村。を。ご。ら。巡。り。索。し。小。の。性。方。も。あ。る

より。高。吉。小。厨。川。へ。進。獲。と。と。く。俄。頃。小。陣。徇。し。め。と。生。る。あ。の。小。を。さ。す。
 歩。を。い。そ。ぐ。く。く。く。と。い。ふ。光。仲。ハ。く。る。失。ひ。さ。す。ん。小。三。郎。ハ
 標。吉。郎。と。共。小。の。柵。に。留。ま。る。生。虜。の。賊。徒。を。禁。錮。し。翌。日。つ。と。め。く。討
 者。夫。婦。を。鎮。守。府。へ。送。り。ま。わ。る。と。備。が。出。陣。せ。後。小。朝。夷。生。い。で。牙
 者。等。閑。ち。ぬ。光。仲。が。心。操。を。告。ぐ。と。叮。嚀。小。命。し。士。卒。六。七。十。名。を
 高。吉。嗣。忠。小。隸。に。留。措。れ。高。利。武。詮。昌。之。ホ。と。そ。の。他。の。軍。兵。夥。む。と。さ。す
 出。ん。と。折。り。朝。夷。三。郎。義。秀。の。腥。く。斬。首。一。級。鐵。楯。棒。の。頭。小。著。る。を
 突。立。く。義。邦。廣。光。共。侶。小。欣。然。と。し。か。り。東。の。士。卒。云。云。と。告。り。け。だ。
 光。仲。急。小。入。馬。を。退。け。慌。忙。死。出。迎。へ。引。く。賓。席。小。請。ま。す。義。秀。と。さ。す
 高。利。の。義。邦。と。向。ひ。を。り。嗣。忠。武。詮。昌。之。高。吉。ホ。の。後。方。小。の。り。あ。り。け。だ。

姓名を告ぐ。義秀を敬ふと甚し。當下光仲の命。朝夷別後の會
 話を小説盡す。量るの冠者夫婦を救れ。牘妖賊経任を撃つ。
 武界勇敢古今無雙としらべ。便是當時第一番の大功あり。
 賢兄の先仲ホをふり捨つ。地由れ多ひん今やも往方を
 この故ふきのり。渴望の思ひ已た死なく。冠者を労ると云ふの
 既ぬく鳳眉を接へ。又明教を受んと欲と。教び足すといと。恭しく述べ
 義秀のやうに。うち合笑と。某もいぬ。杖を當國小曳く。めろ聊
 絶て和殿を訪る。死すべからざる。和殿の約小背に
 命を惜む途の難義。小友を捨て。勢利小附く。軟と云ふ。今如此に
 の知る。吉見主後。又迎られ。その誠心を生られ。疑心立地。氷解せり。現介
 和殿の友を棄つ。不義のふ。人々と知り。初小交す。

結ぶ。こも亦思入る。疑心を釋く。至る。こも亦思入る。幸
 め。世の識者小背指をさ。とぬて。第一番の歡び。又義死ともあり。
 今彼知る。立ち。吉見主後。小背。和殿の鳥鵲川の上。ゆく。こも養
 母小危。窮を救ふ。云々の。と。牧羊来環會。欲く。四圍鎮西
 の盡す。編歴。義秀の母の面影。ん。あ。和殿の識る。め
 ら。ぬ。こ。母小對面。せ。是。第一義の好話。ゆ。美。死限。え。られ
 と。こ。母の。後。往方。き。と。の。靴を隔。癪を搔。と。ゆ。古語。小
 似。の。母の。の。ぬ。め。某。の。の。曉。小。経任。を。敷。ぬ。と。死。直。よ
 走。里。の。の。和。殿。は。あ。る。と。ゆ。の。の。厨川の。柵。の。賊將。吠。又。が。弟。の
 象子。彈。平。太。員。持。と。の。の。盜賊。奴。が。夥。の。賊徒。を。ね。く。籠。れ。の。寄。り。の
 負。戦。死。多。かり。追。捕。等。閑。め。く。時。日。を。過。さ。平。泉。め。く。討。漏。され。し。

賊卒彼知へ集合るべし。備志をばし員持ホハ経任滅亡せしとゆめくが。逃失ざるをある骨折序ハ彼奴を殺し。吉見殿の鎌倉へ歸参る。累取せんと心むる小多の茶の尾が贈りし平泉の地圖より。厨川へ往返す。不思議の捷徑あり。豫てより知りし。繪圖小隨の直走して。昨夕厨川の柵ハ越え偽り平泉より火急の使んと呼門ハ城門守の賊卒ホ。逃し内小入と平泉の使を契あらん。見せしめ。これこの小内見詰り。さるる亂る答云。汝達いまだ。知らぬ。汝使ハ契を賜る。平日無異の時ハあり。のせ平泉の柵ハ今曉奇ハ攻破らる。修羅公戦歿あり。某ハ吠又ぬの。密意を受し。のホ云。象子殿ハ拜謁し。このよりの代告さる。提徑より走れり。とく。入とこのをがせ。賊卒ハ敬馬騷ハ。馳と彈平太ハ云云と報知しけん。

程ありく角門より某を呼入れ。引と客房の序より到りぬ。當下象子彈平太ハ腹心の賊僕ホ。小燈燭を秉り。端近う出。案内せし。賊卒を退し。馳と某を縁頼へ召登。居る。携り鐵棍棒を便り。倚りけ。措き。そが。俣り。上り。弾平太つと。縦火急の使。契あり。豫て。面を識。る。の。を。擇と。遣。る。の。ふ。か。る。是。束。る。の。を。の。く。密使ハ。立。ら。し。め。つ。る。ゆ。り。汝。が。名。ハ。何。と。の。抑。修。羅。殿。を。襲。と。敵。の。姓。名。を。使。さ。る。戦。の。為。体。よく。知。し。つ。ん。の。人。と。問。せ。も。果。む。衝。と。寄。せ。く。内。賊。い。ま。ご。が。名。を。知。ら。む。や。これ。を。吉。見。冠。者。の。平。泉。の。柵。を。火。攻。し。修。羅。五。郎。經。任。只。一。刀。小。誅。し。朝。夷。三。郎。を。ま。と。又。汝。ハ。誅。戮。し。て。盜。賊。の。根。を。断。ん。と。夜。を。こ。め。く。来。つ。る。百。人。で。も。敵。を。嫌。り。ど。斫。殺。さん。牧。券。殺。さん。牧。投。殺。さん。牧。踏。殺。さん。牧。

或ハ捨テ殺さん欲好し小任ト瞬間小死人ぞ山を築キ遊人覺醒をせよ
 と罵る彈平太ホハ勢を取らんと齊一眼張睜里或ハ呆れ或ハ奴
 原来癡者逃さると敦團多と立んとせし。彈平太が足を拂て山崖
 の似筋斗打と起んとる成起しも立ど縁頼小倚りて鐵椽棒を擡取て
 項を礮と打し骨を撲ぬ。首の空さるは揚り。軀ハ俯し倒れり。
 衆皆これ小駭怖と逃んとるを追蒐追詰當坐小七人打殺し庭又
 閃りと下り立と天地小響音けと声をたて立平泉より妖賊経任又ホの柵
 少ハ彈平太ホを天意又任と義秀が如く誅し。闇魔の廳を
 鬧とくハ衆皆物と呼ぶ柵中の賊徒四五百人ヲ勢を憑む劍戟ニ味
 一個の敵と侮り人敷を盡と群と彼此より聚來ハ推取龍て斃んと
 競ふを多ハの隨引り。一棒毎小五人三人斃殺さるりめとあるは

衆賊もそとと崩とて慌忙外と前小立と二十人庭なる
 池ハ滾落と沈り溺るを後らり疾人と推
 程ハ推落と水小溺と推落とハ亦滾び入り沈むり。ゆくと
 いふ敷をたどる残る僅小五六十人大地小平伏し。堂合と助け多鬼
 百合の露を流る血の涙。藤棚なる蔓を斃引ぬ。
 珠敷繫は縛しめ皆樹下小繫留め。隠れをたぬ。石
 燈籠なる燈蓋を擡起し。漏を曲る求獵し。残る奴原ハ
 落亡し。外ハ人氣あるを。近郷小走り。たて
 里人ホを喚起し。云と説示。皆救ぐ。一殘及。彼。若。
 知。義秀が後。後。二三十人。生拘。奴原。里人。
 附。且。柵。守。藏人。軍監。共。厨。川。赴。古。又。の

義秀 衆賊 鑿不 支

ねひあ



道玄の 猿を 加人の ぞろぞろ ぞろぞろ ぞろぞろ 賢朝夷義秀 剽盗譚 玄同居士



光景を捨てて去るべし。もろく弾平太が首級をのこ。如此の事の證やそふ。
鐵椽棒小結びさみたる。彼見多と指し示せば義邦高利のふたふたこの
席ふありと在る。あつく膝の進むを覚む。その勇敢小威服しと興ある
る。よひより。そが中ふ先仲の件の物語成りちゆり。殊更に驚嘆一人の
智慧と武勇とあかまが差別あるの致某此度追討使としく。後ふ
軍兵多たとた鎮守府の守兵と共ふ二千餘騎小及ひし。より。寡死
時も七八百騎五六百騎あるあり。もろく勝負區をめぐ。遂に賊徒ふ
苦しめり。と自殺せむ。と名のりるあり。朝夷婦ハ單身あり。初は後ひつる
の。藁二郎と二三標吉この三人小過ると。かとも。輒く賊柵を竊
り。吉見殿を救ひ。更ふ火攻む。衆賊を屠り刺徑任を敷く。りひ。
その武勇も人力ありぬ。ゆる進て厨川なる。賊將彈平太と誅戮し其れ

少の衆賊を殺刺せり。かの如く勇將猛者ハ和漢今昔小類あり。神武英
略一人の。先仲が如く火をり。賊を攻撃し。と云ふ。あとも。さむる切
あり。就中兵糧車の拙策ハ已ををひ。さむる。さむる。さむる。謀へ行
と。奥より放し火を貸す。車の火薬は程し。一の城門なる。賊兵を
焼走せし。奇なり妙あり。今ハ出陣を急ぐも要あり。夜と共小語り明
さん平坐更と管待し。ら。弾平太が首級を受く。藁二郎を小圓坐ふ
侍。む。仏陀の靈驗四士の復讐言み。義秀小若る。程小實主短夜の
曉る。成り。あそ。その詰目先仲高利小厨川の柵小越く。及び。さむる。
此條の物語。ヨかり。その編を嗣死巻を更く。第五編の。めふ。らん。
明年。茂兒の日を俟べし。

朝夷巡嶋記全傳第四編卷之五

吉田屋

吉田屋

編述

曲亭馬琴稿本



庚辰夏肆月 脱稿

淨書 出像 隨成

出像

一柳齋豊廣画



淨書

江戸 千形仲道

割劔

京師 三四五 井上治兵衛
大坂 一二二 山崎庄九郎

刊字校訂

平安 檨亭琴魚

文政四年辛巳春正月吉日發行

江戸馬喰町三丁目 若林清兵衛

刊行

筋違御門外神田平永町 山崎平八

書肆

大坂心齋橋筋唐物軒 河内屋太助

朝夷巡嶋記第五編

第四編中より秀光仲及時政より時々の事あり佳境あり
全くその趣をつくるにこの編に至りて多きく佳境あり
ふる作意の摠要ありあり明春出版遅滞あり

里見八犬傳第四編 五冊

製本出来よの節より

朝夷巡嶋記初編より

第四編より先年より遊々を出入りあり

家傳神女湯

一包 婦人瘧病中より第一産前産後ちの及ち小病たり又うぢりふ
いづれもあひひのちひく急んをふせぐべしとあつちのあつち
百銅 薬とあつちの功のう神妙なりなり

精製奇應丸

茶もちをえを家傳の加けん小よりまをりくその功ありつちのきりふ
百倍を○大包二百粒余入代式身中包三十二粒代を及ち小包十粒余入

婦人つら虫妙薬

婦人毎月つら虫ありふりちの即ちあつちのり又産後ふりあり
くちりふ妙あり 一包代六十四文 半包代三十二文

熊膽黑九子

くまの胆の正まをるをえをえ用のく製法の加けん家秘をつくせり
熊胆汁をりてくまの胆をまをるをりてその功をえり一包代五文

製劑并弘所

江戸元飯田町中坂下南側四方みそ店向
神田明神下同朋町東新道門内大竹町

瀧澤氏



取次所△江戸芝神明前

いつと屋市吉高 △大坂心齋橋筋唐物町南へかちり屋太助

病加本必用

江戸神田 謙齋龍澤興繼宗伯著 画圖入 辺判
江戸に不えの書に産婦はうさうその他まをる者病乃
あつち禁物なりつちのふりてその功をえり一包代五文

秘笈及名方

右同著 経験の良薬をえ集む濟急茶餅小便宜の書也 未判

曲亭翁画頁扇取次仕

浪華書林

文金堂森本太助 欽白

